

新島襄の思想的背景としての 会衆主義キリスト教

ラトガース大学教授
大林 浩

はじめに

近年、同志社大学神学部に付随して「二神教学際研究センター」が設けられた。それは、ここ50年来熾り続けるパレスチナ問題、イスラエルとアラブの紛争がユダヤ教とイスラームとの文明の衝突、湾岸戦争に続くイラク戦争がキリスト教とイスラームとの衝突、と見られる可能性を踏まえて、そのどちらからも地理的、文化的、民族的に距離を持つ中立的な日本で、三大宗教の対話と相互理解を通して、和解への糸口を探ろうとする重要な企てである。文部科学省の肩入れから窺えるように、日本政府の期待も大きい。三者は確かに一宗教としての共通の地盤を持つだけでなく、歴史的にも繋がっている。キリスト教はユダヤ教を母体としており、イスラームは両者を共に背景としている。しかし、一口に一宗教と言えども、それらの発祥と展開を見れば、それぞれが特異な性格を持っていることが分かる。

世界三大宗教の成り立ち （会衆から始まったキリスト教）

前14世紀にモーセが民を率いてエジプトを脱出し、シナイ砂漠流浪の最中にイスラエルという新しい民族国家を誕生させた。そのイスラエルの宗教が、後にユダヤ教となったのだが、それは単に宗教と言うより新しい国造りであった。したがって十戒に淵源するモーセの律法は、宗教祭儀はもとより、民法、刑法、商法から食生活、性生活の細にいたるまで、イスラエル民族国家の全般にわたる規範となった。いわば六法全書のような役割を果たす。法なしには国家社会は成立しないが、その法を神との「契約」に基づくと、超越性を与えることによって、権力者たちの恣意や乱用から守る。モーセにおいても、後のユダヤ教においても、宗教と国家とはこのように不可分のものとなる。日本語で「まつりごと」が宗教をも政治をも意味していた祭政一致の形態に準ずるものである。イスラエルが最

終的に国土を失い、政府や為政者をもった国家性（statehood）を失って、諸外国の寄留者となっても、世界中に離散した形で、2000年このかたユダヤ人、ユダヤ教は国民国家性（nationhood）を失わずに存続して来た。それ故にまた、どの社会にも完全には溶け込めないでいる。

モーセからほぼ2000年のち、後7世紀にムハンマドは、同様に全く新しい宗教社会を始動させた。イスラームは単に宗教ではなく、ムハンマドの後継者たち（カリフ）を政治的指導者として新しい社会の礎を築き、その支配圏を拡張させていった。メッカからダマスカスに中心地を移したウマイヤ政権は、イスラーム勢力圏を目覚ましい勢いで世界大に拡張させ、都をバグダッドに移したアッバース王朝は、世界の文化水準の先導を切るものまでにイスラームを高めた。ムハンマドのコーランは神の言葉と崇められ、それは間違いなくシャリーアという法典を生み出し、それによってイスラーム社会の全般に規律を与えた。宗教と政治と

はここにおいても不可分である。今日のイスラエルがユダヤ教国家と公然と名乗り、イランやサウジアラビアがイスラーム国家と唱え得るのもそれ故である。タリバン政権下のアフガニスタンはその最も先鋭化したものを実現させようとしたまでのことである。トルコ、シリア、エジプト等、他の国々が己をイスラーム国とは定義づけていないのは、近代ヨーロッパのモデルに従っているからであって、内容的、実質的にはイスラームへの深い繋がりを保っている。

こうしたユダヤ教やイスラームと比べるとイエスの宗教は全くその性格を異にしている。キリストと呼ばれるようになったイエスには、新しい国家を創設する必要はなかったし、その意図もなかった。イエス自身が法典を布いたわけでもなく、キリスト教には法典の必要は長く存在しなかった。イエスの宗教は、神信仰に立ち帰ることによって、生の根本的転換を人々に迫るものであって、その転換は自我の精神の内奥に救いをもたらし、また外的には愛と自己犠牲をもって他者

に仕える新しい人倫を生み出すものであった。こうして「新人」となった人々によって形成される「神の民」、新しいイスラエルをイエスは始動させたのである。古代イスラエルの12部族に擬えて12人の弟子たちを募ることから始まったが、彼らはイエスの呼びかけに応えた人々であり、そこに形成された共同体はエクレーシア、いわば「呼び集められた」有志たちの集まり、即ち「会衆」（Congregation）であったのである。一般に「教会」と訳されているエクレーシアはこのように呼びかけに答えた「有志」たちの共同体である。キリスト教はユダヤ教、イスラームと異なつて、「呼びかけ」の宗教、「宣教」の宗教であり、そこに形成された共同体は「この世に在つて」、この世への責任と任務を担いながらも、「この世に帰属しない」、神の民の共同体であった。この共同体はユダヤのような民族国家をも、ローマのような帝国々家をも超えた神の「会衆」であった。会衆主義キリスト教は、このようにイエスの初代に見られる形である。キリス

ト教は古代ローマ帝国の支配下で300年間このような純粹な形、国家でない共同体、権力を持たず、むしろ虐げられ迫害されながら、ひたすらこの世に仕える義務のみを引き受けた自由人の共同体として拡がって行った。今日でもその時代のキリスト教を真のキリスト教だと主張する人たちは多い。

国家と結びついたキリスト教 ～ローマ時代から中世、そして宗教改革へ～

キリスト教がこうして拡がって行った地中海世界を長く支配したローマ帝国もやがては疲弊し、東西ゴート族等の圧力を逃れ、ローマ市を捨てて首都を東のコンスタンティノープルに移した。広大過ぎる帝国をもうや軍勢力だけでは統治し切れなくなった時、帝国内の多様な民族の間にキリスト教信仰は既に一つの共通な絆となり、広く、深く人心に染込んでいた。ローマ帝国はこれを選択して、もう一度帝国の建て直しをはかった。これが、4世紀初頭のキリスト教公認である。

この時はじめて、キリスト教は国家との繋がりを余儀なくされ、ユダヤ教、イスラームと同様の祭政一致に近い状態を見ることになるが、これをもってキリスト教の墮落と見る人たちも少なくない。

ローマ帝国は東のビザンチン帝国に変貌して、オスマン・トルコに征されるまで、その後も長く存続しはしたが、ローマ市を中心とする本来の帝国は5世紀に崩壊してしまった。今日我々がいうヨーロッパは、こうして支配者を失い、蛮族たちが寸断する世界となったが、帝国が残して行った広大なヨーロッパを預かる役目を引き受けて大きくなったのが、ローマ・カトリックのキリスト教である。したがってカトリックは、ローマを中心とした宗教組織となり、国家のような階層制度（ヒエラルキー）を設けローマ法に代わる教会法（Canon Law）を制定し、皇帝に代わる教皇が主導権を手中に納めて、この真空状態を埋め、ヨーロッパを混乱から救って来た。カトリック教会は世界的（帝國的）組織となり、残されたヨーロッパを管理すべく、宗教的の

みならず政治的支配権をも、4世紀のコンスタンチヌス大帝から委託されたと主張する文書さえも捏造して保管していたものである。武力に訴えなければならぬ時にはたいてい諸侯の軍勢力を借りてはいたが、一時は教皇庁自身が軍勢力を備えたこともある。キリスト教の墮落と人が言うのも無理はない。

ローマ・カトリック教会は文字通りヨーロッパの独占宗教となる。一地域には一つの教会、住民はすべてがその教会に属するという「地域教会」（Parish church）という形態がとられ、そうした多くの教会が一つの司教区をなし、司教（bishop）が広大な範囲を管理統率する。何世紀にもわたって、寄進などで所有地を築いて来た教会の司教たちは富も影響力をも増し、したがってヨーロッパ各地の司教たちの任免権をめぐって、教皇庁と諸侯たちが争ったものである。こうした宗教独占の状態の最中、教皇庁は「救い」というものを免償状で購入しうるといふ制度でもって、莫大な基金を募り、それでもって16世紀初頭、今日も

聳えるローマのサン・ピエトロ寺院を構築した。これが宗教改革の火繩とならない筈はない。

1517年にドイツのマルチン・ルターが改革の狼煙をあげたが、神聖ローマ帝国を背後に控えた教皇庁に向かって改革を断行し得よう筈がない。ルターがザクセンのフリードリッヒ賢侯を頼りにしたのも無理はない。ルターの宗教改革によって生まれてきたプロテスタント・キリスト教はルーテル教会と呼ばれるようになったが、それは、フリードリッヒを初め、ルターが呼びかけたドイツ諸侯たちの領地の「領邦教会」となった。ルーテル教会はドイツから北欧に広がったが、ことごとく領邦教会、国教会となった。宗教改革といえども、その改革は神学思想と祭儀に留まるものであり、教会と国家との係わりに関しては中世のカトリックと何ら変りはない。初代イエスのあの「会衆の教会」、「宣教」を通して「呼び集められた」有志の教会はどこへ行ったのか。この世にあり、この世に仕えながらも、「この世に帰属しない」あ

のエクレーシアはどこへいったのか。

宗教改革はスイスのチューリッヒにおいてもツヴィングリによって慣行され、それが「改革派教会」を、ジュネーブにおいてはカルヴィンによって、プロテスタント陣営においては最も広く影響力を持つようになった「長老派教会」（プレスビテリアン）を生み出したが、そのどちらにおいても教会はそれぞれチューリッヒ、ジュネーブというカントン（市あるいは、郡のようなもの）の議会に支えられ、その議会の権限によって遂行されている。宗教が政治権力を借りて改革を成す。これはイエスの選んだ道でもなければ、イエスの呼び集めた共同体でもなかった。宗教改革の荒波が大陸から英国に押し寄せてもこのパターンに変わりはなかった。

英国の宗教改革は先ずもって王室の婚姻問題に端を発する。16世紀の熱心なカトリック王ヘンリー8世が男子の世継ぎを得んがために次々と后を換えていく。離婚を認めないカトリックから都合上便利なプロテスタントに乗り換える。ヘン

リー8世から、エドワード6世（プロテスタント）、女王メアリー（カトリック）と、治世交代ごとに宗教が変わり、国民は翻弄された。そして転換ごとにカトリック側、プロテスタント側の多くの信徒たちが迫害され犠牲になった。そこで英才エリザベス1世が考え出したのが、そのどちらでもない「英国国教会」（Anglican Church）であった。カトリックの様式とプロテスタントの神学を折衷した教会となり、ローマから縁を切って独立した。かくしてイギリスの宗教改革も宗教的な動機というよりも政治的動機から来る国家の処置であった。

隣のスコットランドも英国に倣ってローマ・カトリックからの独立を敢行するが、彼らが採択したのは、ジョン・ノックスがジュネーブから持ち帰った長老派のキリスト教であるし、これもジュネーブにおけるように、いや、もっと徹底して、スコットランドの議会が採択した「国教」となった。

新島襄へと繋がる会衆主義の発展 「自由・自治・独立の信念を貫く」

王権が特に強調される英国において、いったんアングリカンが国教となり、国王がアングリカン教会の首長となると、それ以外のキリスト教は弾圧を受ける。「国教」なるものを、キリスト教と国家との、在るべからざる癒着、宗教の腐敗墮落だと考える純粋なキリスト者たち、彼らは英国の教会をイエスの意図と聖書の基本へと戻そうとした。通称ピューリタン（清教徒）と呼ばれる人たちである。彼らは英国国教会の圧政下で特に苦しみ、多くが犠牲となった。そのピューリタンたちの一派に、独立派（Independents）または会衆派（Congregationalists）と唱える人たちがいた。前述の如く会衆主義はイエスの昔に淵源するが、プロテスタント・キリスト教の一派として知られるようになったのは、このピューリタン運動の時からである。

ピューリタン達はアングリカンの圧政

クはもとよりプロテスタント諸教会のすべてが、ヨーロッパでは国教会あるいは領邦教会として出発しており、国家が法でもって統制を図る如く、教条（信仰告白文とか信条）でもって統一を図ろうとする傾向を持つが、会衆派キリスト教は教条を好まない。信条を作成することはあっても、それは人々に指針を示さんが為であって、統制し拘束する為のものではない。これはジョン・ロビンソンも述べたように、神は聖書を通して絶えず新しく我々に語りかけるといふ信念、真理は永遠であつても、人間がそれを捉えることにおいてはいつも暫定性が伴うといふ信念からである。特定の水結した教条で人を拘束することを好まぬ謙虚さからである。したがって会衆派キリスト教は組織として、国家のように大々的なところか、絶えず分裂を許し、新しい信念を持つて分離する人を生み出していく。ニューイングランドに到着した会衆派はアメリカのキリスト教になつても、ロジャー・ウィリアムス等、徹底して信仰の自由を信奉する人たちの分離を可能と

し、アメリカに於けるバプテスト教派を誕生させた。

アメリカという土壌、そこは古来の伝統とか、出来上がった支配や管理の組織も体制もない土壌、宗教的には絆も所属も失った移民たちの社会であつた。したがって教会は人々を再び新しく「呼び集め」なければならぬ土壌、イエスの様に「有志」を集めなければ教会を形成することのできない土壌であつた。こうして会衆派のみならず、嘗てはヨーロッパで国教会であつた他のすべての教派も、会衆派を見習つて、「呼び集められた」教会とならざるをえないような土壌である。

会衆主義キリスト教は、神の主権を徹底して強調するカルヴィンの厳格な神学と、いかに迫害されようと国家や地方政府からの干渉を拒み続けた大陸のアナバプテストの自由思想とによつて支えられている。しかし、アナバプテストたちは、その後裔（うぐい）のアーミッシュやメノナイト派に見られるように、長い迫害と苦難の経験から厭世的、逃避的になり、現世

に対して、焦点を聖職者の衣装の問題や聖餐式においてパンや葡萄酒に向つて跪くこと、十字を切る仕来たりや結婚式の指輪の使用などに集中して抗つたが、これらは決して、形式に拘つた表皮的な争いではなく、教会が国家の手先になつて人民を統御する現実の表れだとして死闘した。オックスフォード大学は主にアングリカンを、ケンブリッジ大学はピューリタンを支持する傾向にあり、その抗争は長く続き、一時は王制までも覆す（1640～60）ほどであつた。ピューリタンといえども所詮英国人であり、英国に対する忠誠を崩すまでには至らなかったが、このピューリタン達の中でも、会衆派ピューリタンだけは、その信仰の純粋さから、妥協を許さず、分離派（Separatists）と呼ばれながら、投獄をも辞せず、犯罪者として追われても信念を貫いた。中でもケンブリッジ大学出身のロバート・ブラウン（1550～1633）はその先鋒を切つて、会衆派キリスト教の信念を数冊の文書で公にし、同世代のヘンリー・バロー、ジョン・グリ

ーンウッド等は当局によつて、信仰のために絞首に処せられた（1593）。ブラウンによれば、キリストを心から信じ、キリストにおいて互いに結ばれる有志の集まりのみが教会であつて、その会衆が牧師、教師、長老その他の働き手を選び、神のために己を自主的に運営していくのである。自由、自治、独立の精神はここにはつきり示されている。

分離派の会衆主義キリスト者たちはジョン・スミス（～1612）やジョン・ロビンソン（～1625）等の指導者に率いられ、大挙してオランダに難を逃れ待機していたが、英国での弾圧が緩和せず、アムステルダムやライデンを発ち、自由を求めて新大陸へ向う。メイフラワー号で彼ら清教徒たちが、アメリカ大陸のプリマスに上陸した（1620）ことは余りにも有名である。

会衆主義キリスト教は徹底して各個教会の自由と独立を守り、国家から、教会組織内での上層部（司教や監督や本部等）から、また教会連合の管理局などからの拘束、統制、干渉を一切拒む。カトリッ

社会に見限りをつける方向に向つたが、会衆派とバプテスト教派は社会に対する責任感を失わず、世俗社会の権力や干渉は拒んでも、社会への奉仕は忘れない。イエスの人倫が愛と自己犠牲の人倫であつたことを覚え、社会的責任を最も強く感じるキリスト教として活躍し続けた。19世紀から20世紀にかけては、「社会的福音」といふ神学を打ちたて、労働者たちのためのキリスト教、資本主義社会の醸成する社会悪や富の不均衡と闘う教会、人権を尊び黒人解放、公民権運動促進の先鋒を切つたキリスト教と、会衆派の残した遺産には注目すべきものがある。

帰国後、新島襄が明治新政府の要請を受けても、政府に与することを辞したのも理解しうる。彼が持ち帰つた伝統、その上に建てられた同志社のキリスト教は、こうして独立、自由、自主の精神でもつて、近代日本に大きな貢献をもたらすものとなつたのである。

特集 ● 座談会

キリスト教、宗教、同志社

—日本の宗教事情とキリスト教教育を考える—

●出席者（発言順、敬称略）

- 堂腰きみ子（同志社幼稚園長）
菅根 信彦（日本基督教団神戸教会牧師）
中川 好幸（同志社小学校教諭）
桜井 希（同志社中学校教諭）
平松 譲二（同志社女子中学校・高等学校教諭）
中村 信博（女子大学学芸学部教授）
越川 弘英（大学キリスト教文化センター助教授）
原 誠（大学神学部教授、神学部長）
- ### ●司会
- 水谷 誠（同志社時報編集委員会委員長、大学神学部教授）



堂腰きみ子氏

どうこし・きみこ／1952年生まれ。
保育科卒業後、同志社幼稚園教諭となる。
1989年より主任教諭、2005年度より園長。

キリスト教精神に基づき、「生きる力」を育み、新たな文化を独自性を持って創っていきける人間として成長できるように、「遊びのなか育ちの芽」を大切に「知」の保育を行っている。
中立売署幼児交通事故防止対策連絡会会長、人づくりネットワーク委員、京都府就学前教育・研究プロジェクト委員。京都府私立幼稚園連盟理事、京都府私立幼稚園協会理事を歴任。キリスト教保育に携わり、地域と深く関わりながら子育て支援の活動を展開。

聞かせたり讃美歌を指導したりしています。園児たちの家庭も今はほとんどがクリスチャンホームでないのが現状です。園が子どもたちに伝えていくキリスト教精神を次に家庭にどのように伝達し、理解していったらいいかが課題です。なぜなら、園児と保護者と園が一体となることが大切だからです。

今の時代の子どもたちはすぐにカッとなくなると言いますが、この傾向は幼児期から始まっているように思います。それに関わっている保護者の方々、夫婦関係や家庭のあり方、子に対する親の考え方が随分変わってきています。その一つに、良心教育よりも園児の知的な発達、つまり、いかに偏差値を高くするかという教育に関心が寄せられているという現状があります。

105周年の記念誌を作成した時、年配の卒園者の方に原稿依頼をいたしました。70、80代の方の幼稚園の一番の思い出といえば、「神様の愛に守られた礼拝をいつも行っていたことが今でも記憶にある」と多くの方が書いておられます。それを読ませていただき、同志社の入り口であるこの幼稚園で、今一度キリスト教精神に基づいた教育を大切に守っていくと考えています。

キリスト教を幼稚園児に伝えるのはとても難しいことですが、いつも自分を守りつづける天の働きがあることを子どもたちの心に留めてもらい、同志社幼稚園

にあれば「キリスト教、お祈り、讃美歌」があることを知ってほしい。園児が家庭の食卓で「お母さん、まだ食べたらだめよ。お祈りしてから食べるのよ」とか「おばあちゃんや友だちの病気が早く治るようにお祈りする」など、「祈る」ということを子どもが家族に伝えていくべきです。そして保護者の間から「聖書を読んだり讃美歌を歌ったりする会を作りましょう」という動きが出てきて、保護者と一体となったキリスト教教育ができていくことを願っています。

水谷●日常的に、朝は礼拝から始まるのですか。

堂腰●そうです。学年によって礼拝のカリキュラムは違い、たとえば3歳児は毎日天地創造の話から繰り返して聞かせています。教材を使うと入りやすいので、字の書いていない本を使うなどして工夫をするかたわら、先生たちも聖書研究を行っています。あとは新約聖書を用いて、園児が興味を持つ分かります。話を集まって合同礼拝をして、神様の話を聴いています。「こどもさんびか」は常にくさん歌い、さらにもっと歌いたい園児たちは「聖歌隊クラブ」に入って、午

キリスト教を基盤とした 幼児・児童教育の現状

水谷●本日は、同志社のキリスト教のルーツを念頭に置きながら話し合いを進めたいと思います。現在の日本の宗教を巡るさまざまなトラブル、いじめや自殺、子どもへの虐待あるいは子から親に向かう激しい反抗など、青少年を巡る諸問題について。また、私たちは同志社の中にいて半ば無自覚に過ごしておりますが、同志社のキリスト教の特色について話し合ってみたいと思います。法人内の各学校の特色を踏まえつつ、先生方の現場から材料をいただきながら進めさせていただきます。

まず、現在の日本社会が抱えている子どもへの養育や教育を巡る問題から。非常に深刻な問題ですので難しいとは思いますが、先生方が現場で抱えておられる問題、あるいは取り組みなどからお話してください。

堂腰●私はキリスト教教育を専門として子どもに教えているわけではありませんが、キリスト教精神に基づき礼拝を通して、幼児に神様に愛されて、守られているということを知らせるために、聖話を



菅根 信彦氏

すがね・のぶひこ／1958年生まれ。82年東海大学文学部史学科卒業。86年同志社大学神学研究科博士課程前期修了。修了後、日本基督教団神戸教会伝道師・副牧師。92年よりアメリカ合同教会・シカモア組合教会日語部牧師に就任、同時にサンフランシスコ神学校博士課程で学ぶ。94年に日本基督教団鎌倉恩寵教会牧師に就任。2002年4月より日本基督教団神戸教会牧師ならびに同付属いずみ幼稚園々長に就任、現在に至る。顕栄保育学院理事、社会福祉法人神戸真生塾理事、神戸女学院評議員、神戸YMCA評議員、日本基督教団兵庫教区総会議長。(神戸教会は、西日本での最初のプロテスタント教会として、アメリカンボードの宣教により1874年に摂津第一公会として設立された教会)

後の時間に讃美しています。

菅根 ●神戸教会は宗教法人の2つの付属幼稚園を持つていて、私は教会に隣接している幼稚園の園長も兼務しております。うちの幼稚園でも、今お話があったようなプログラムで教師の祈禱会から始まって礼拝をしています。しかし、教師が皆クリスチャンであるわけではありませんので、毎日の聖話がどこまで聖書やキリスト教の核心的な部分を突いているかという問題があると思います。

うちの幼稚園では今、ダウン症の子が2人、自閉症、水頭症、脳性麻痺の子が1人ずついます。現在、神戸市中央区には私立幼稚園が8園ありますが、障がい児を受け入れている幼稚園は1つもない

のです。公立も受け入れていない。したがって子どもと親御さんたちは、かなり遠くから一つひとつの幼稚園の門を叩きながら来ているわけです。ぎりぎりどこで一緒に生活していけるのかを、現場の教師と協力しながら、保護者の理解を得ながらやっているのが現状です。そのことを通して、弱さを抱えて生きている子どもたちとの生活の中で、むしろ聖書のメッセージが広がっていくような経験をしています。言葉として伝えていくことの限界と、逆に一緒に生きていくことによってその理念が広がっていくこと、一種の希望みたいなものを持つてやっている毎日です。

水谷 ●そういったお子さんなどは幼稚園

のような礼拝づくりができていいるのでは
 と思っております。

キリスト教教育とは 超越した存在に対する謙虚さを 自分の人生に組み込むこと

水谷 ●親の要求と学校のめざすところが
 ずれることがありますね。子どもも「キ
 レる」などという反応を見せることがあ
 る。そういう傾向は中学校あたりになる
 と、はつきりしてくるのでしょうか。

桜井 ●子どもたちの宗教的なバックボ
 ーは本当に様々です。もちろんクリスチ
 ャンの家庭の子どもも数人いますが、む
 しろ神社やお寺の子の方が当たり前のよ

の先生だけではなかなかお世話をしきれ
 ないと思いますが、どなたか手伝いに来
 ておられますか。

菅根 ●非常勤も置いています。教会の
 人的な力は裾野が広く、たとえば教会の
 お医者さんが園医になっておられます。
 眼科、内科、小児科、歯科も、健康管理
 をしてくださる方は、すべて教会のボラ
 ンティア。非常勤も全員が教会のボラン
 ティアで、それがなければできません。
 教育、現場、教会がジョイントして、一
 つの力になっているのだと思います。こ
 れは普通の学校法人の幼稚園だと、かな
 り難しいのではないのでしょうか。

水谷 ●小学校では、どういう子どもを育
 てようとしておられるのでしょうか。

中川 ●小学校は2006年4月に始まっ
 たばかりで、私も前任の学校がありまし
 たので、4月からの宗教教育の方向性を
 考える時間が余りありませんでした。そ
 の中で自分が一番大切にすべきだと思っ
 たのは、やはり礼拝ですね。学校の中心
 に据えるのは、やはり礼拝であるべきだ
 と。そして、小学校の児童を前にして、
 礼拝とはどういうものであるべきなのか
 を考えた時、先ず礼拝を楽しい空間にし
 ていこうと。そしてチャペルを出た時、

一人ひとりの子どもの中に温かい気持ち
 が残る礼拝の時を持てたらいいなと思っ
 てやってきました。

宗教の授業は担当者だけでできるわけ
 ですが、礼拝は全教職員の理解と協力が
 ないとできないことです。キリスト者が
 少ない職場では、特にそれが課題ではな
 いかと思えます。そして、その意味では、
 教職員が先ず（子どもたちとともに）礼
 拝をしなければ子どもたちに全く伝わら
 ないと思いましたが、そのことを教職員
 の皆さんに何とか伝えていく努力をし
 ています。もちろん教職員にも温度差が
 あると思いますが、今までやってきた中
 では、おおむね皆さんがその時間を大切
 にしてくださり、教職員も楽しいと思え



中川 好幸氏

なかがわ・よしゆき／1962年生まれ。
 同志社大学文学部英文学科卒業。ニュー
 ヨーク州立大学（FIT）広告コミュニケ
 ーション学科卒業。ハーバード大学教育
 学部大学院Technology In Education専攻
 修士課程修了。同志社大学大学院神学研
 究科博士課程前期修了（組織神学専攻）。
 20年間中学生・高校生の英語教育・メデ
 ィア教育に携わる。2006年より同志社小
 学校宗教科嘱託講師、日本基督教団補教
 師資格取得。2007年より同校教諭。生か
 されているということに感謝しつつ、
 「生きる力＝福音」を土台に据えて、学
 校と教会という場で仕えていきたいと願
 っている。
 共訳書に『多元的知能の世界』（ハワ
 ード・ガードナー著、日本文教出版、2003
 年）、『スマートスクール』（デビッド・
 パーキンス著、高陵社、2007年刊行予定）。

うに来ています。僕が必ず生徒や保護者
 に対して最初に説明するのは、同志社の
 キリスト教教育は決して押し付けけない、
 強制しない、キリスト教信者を作ること
 がねらいではないということです。

最近とみに思うのは、人間の存在や限
 界を超越したもので自分の人生を考
 えようというのが宗教の営みの一つだと
 すれば、人間がその超越者に成り代わろ
 うとする動きが今非常に多いということ
 です。カルト集団もそうですし、今の宗
 教ブームを見てもそう思います。とりわ
 け愛国心が非常に強調されている昨今、
 今度国が超越者に成り代わろうとして
 いるのではと、僕などは考えるわけです。
 そういう中で生徒にきちんと宗教の話を
 すると、子どもたちは意外と素直に宗教
 のあり方を聞きます。拒絶反応を見せる
 ケースを僕はほとんど見たことがありま
 せん。「いや、自分は無宗教だから」と
 言っているも、こちらが噛み砕いて話す
 ことに気づくわけです。人間を超越し
 た存在をいつも僕たちは自分の中に組み
 込んで生きているんだということに気づ
 く。そうすると、聖書の話に非常に入っ
 ていきやすい。それが僕と生徒たちとの



桜井 希氏

さくらい・のぞみ／1966年生まれ。
同志社大学大学院神学研究科博士課程前期修了。日本基督教団天満教会担任教師を経て、1996年4月より同志社中学校聖書科教員。新島襄と建学の精神、ユダヤ・キリスト教理解、聖書を担当。ゲーム、ワークショップ、グループ発表などを取り入れた授業展開に取り組んでいる。著書は『教材新島襄』（共著 新教出版社2000年）『新島襄への扉―真誠の自由を求めて』（共著 日本キリスト教団出版局2006年）。

信頼関係だと思っています。

むしろ気をつけないといけないのは、「自分は神ではない」ということを自ら言い続けないと、教師は「我に従え」というような誘惑に陥りがちです。生徒を評価する側に立っているわけですから、いつも我々は人間であって神ではないのだという姿勢で生徒と向き合わない、宗教教育あるいはキリスト教教育は成り立たないのではないかと。そういうところから、ともに神に向かって一緒に歩んでいく、謙虚になるという姿勢がでてくるのではないかと思います。

平松●私たちの学校では中学から高校を含め、6年間という少々長いスパンで生

徒と接することができます。思春期で難しいとされる中学校の時期から、少し落ちて大人になっていく高校の時期までを見守ることができるのは幸せですね。

話は戻りますが、僕の2人の子もたちがキリスト教系保育園で育った姿を見てきて、幼稚園や保育園時代の宗教教育はとても大切だと思いました。その子たちの親として思うのは、公立の小学校へ行くと保育園で体験したキリスト教教育が継続しないことが残念で仕方がなかつたですね。子どもたちは教会学校へは通っていますが、普段の学校生活の中で宗教教育が途切れてしまうのは本当にもつたないことです。女子中高にはキリ

スト教系幼稚園で育った生徒もいますが、小学校の6年間をキリスト教と関係ないところで過ごした生徒がほとんどです。したがって、私たちはゼロからのスタートという意識でキリスト教教育に取り組んでいます。そういう意味でも、私は同志社小学校に非常に期待をしているわけです。

宗教教育とは、本当に目に見えないものです。種を蒔いてすぐに芽が出て花が咲くものではありません。しかし、私たちは福音の種を蒔き続けなければなりません。そういうことを実践できるのは、やはり礼拝なのです。多くの女子中高の卒業生の話を聞くと、やはり礼拝の時間や讃美歌が懐かしいと言ってくれます。女子中高では、毎朝必ず全員礼拝で一日を始め、帰日も終礼をして終わるということをやっています。また、校内行事だけでなく、遠足、クラブの合宿など、ありとあらゆる行事でも、礼拝に始まり礼拝に終わるということを伝統的にやっています。生徒たちには、初めはやらされていくという意識が強いかも知れませんが、しかし、これらを習慣づけることで、ある程度の種時きをしているのかなと実感できます。残念ながら、ほとんどの場



平松 譲二氏

ひらまつ・じょうじ／1967年生まれ。
1986年新島学園高校卒業。1990年同志社大学神学部卒業。1993年米国（ワシントンD.C.）のジョージ・ワシントン大学大学院教育人間発達学研究科情緒障がい者教育学修了。1995年同志社大学大学院神学研究科博士課程前期修了。学生の頃からキリスト教教育に興味を持ち、新島襄のキリスト教教育論を研究。1995年より同志社女子中学校・高等学校聖書科教諭、現在宗教部主任。日本基督教団正教師。著書は『教材 新島襄』（共著、新教出版社、2000年）、『新島襄への扉―真誠の自由を求めて』（共著、日本キリスト教団出版局、2006年）。

合、芽が出るところを我々は見ることができませんが、多くの卒業生が今現在も教会に繋がっているのは大きな意味があるのではと感じています。

水谷●僕は昔、大阪のキリスト教系の女子高校で教えた経験があるのですが、授業のうちの最初の15分くらい讃美歌をよく歌ってました。そうすると雰囲気がい上がるんですね。これは何を目ざしているんでしょう、知育ではないですよね。先生たちは頭を通してだけでなく、キリスト教の何かを伝えようとしている。それは何なのでしょう。

堂腰●毎日の礼拝の中で讃美することによって、気持や心が一つになって共有しあえるひと時なのかもしれません。感謝

や他者に対する思いやりを育てることに繋がることが、キリスト教教育でもあると思います。心の教育や成長は、小さい時ほどとても大事だと思うんです。自身自身の気持ちから、苦しみや悲しみに置かれている人たちのために祈り、手を差しのべることができるようにな豊かな子どもに育てていくことが、私たちに与えられた責務だと思っています。

中川●祈りの心には、本当に驚かされます。礼拝を始めて1学期が経った時、学期の終わりに振り返りを行った時に、自分はいつも病気のおじいちゃんのことを礼拝でお祈りしているとか、鳥が怪我をしたので食事の前にクラスみんなでお祈りしたというのを聞いた時、びっくり

するほど、そういう心を子どもたちは持っているのだなと思いました。また、祈るというのは、自分は神ではない、自分は絶対ではない、自分を中心に据えているのではないと知ることでもあります。子どもたちの祈りには、それが自然に表れているのではないかと思います。

自立の進む中・高校生、大学生 に対するキリスト教教育の難しさ

桜井●礼拝という枠組みの中に中学生を入れることのしんどさがありますよ。今の中学生に対して、黙祷、讃美歌、聖書朗読という、いわゆる教会の礼拝のフォームをそのまま使えるかという問題があります。学校の礼拝の創造性が問われるといえます。幼稚園や小学校では、子どもとの共同作業の中で礼拝を生み出すことが恐らく可能なでしょう。しかし、小学校で宗教教育が途切れてしまうというお話がありました。中学生をその枠組みの中に入れ込むにはそれなりの困難があるし、学校の教職員でさえ、礼拝の意味や意義を考えるのは難しい。そういう課題があるのは現実ですね。

菅根●生徒は讃美歌を歌ってくれるんで



中村 信博氏

なかむら・のぶひろ／1955年生まれ。長野県出身。81年同志社大学大学院神学研究科博士前期課程修了。日本基督教団霊南坂教会担任教師（伝道師、牧師）を経て、86年より同志社女子大学。ミュンヘン大学客員研究員、同志社女子大学宗教部長を歴任。学芸学部教授。専門は旧約聖書学。現在の研究課題は、メディアや倫理など現代的視点と聖書との関係。全学共通科目「聖書」を担当。所属学会は日本基督教学会、日本旧約学会、日本オリエント学会、宗教倫理学会など。（財）日本クリスチャンアカデミー常任理事。著書は『新共同訳 旧約聖書注解Ⅰ』（共著、日本基督教団出版局、1996年）、『新共同訳 旧約聖書略解』（共著、日本基督教団出版局、2001年）、『聖書 語りの風景』（共編、キリスト新聞、2006年）、ほか論文等多数。

すか（笑）。

桜井 ●讃美歌を歌う子、歌わない子、しゃべる子、色々な子がいます。しかし「讃美歌を歌いなさい」と口をこじ開けるようなことが、本当に良いのかどうかということが問われますね。ちょうど自立してゆく時期にありますので、一つひとつのことに生徒は納得を求めます。そこへ礼拝を押し付けても対話は生まれません。礼拝が嫌や習慣づけの場になってしまふと、生徒はそこで沈黙し、飼い馴らされてしまふ。もっと礼拝はライブでアクティブで、ドラマ性を秘めているものであつて欲しいと思いますが、そこが課題です。

平松 ●それは女子中高でも、すごく感じ

ます。高校になると、もつと大変になってくると思います。ただ、女子中高では、讃美歌は上級生になっていくほど歌ってくれますよ。讃美歌を覚えていくという

のもあるでしょうが、年間で数多くの讃美礼拝を行っていることも影響していると思います。また、クリスマスの時期になるとキヤロルの練習をするのですが、生徒たちはキヤロルが大好きで、廊下に出てもキヤロルを歌っています。話だけの礼拝なら高校生には難しいものがあると思いますが、歌の礼拝、音楽の礼拝には非常に乗ってきます。これからの時代、礼拝の形にとらわれず、音楽などいろんな要素を採り入れていくといったのかなと、反省も含めて思っています。

ではない。我が子がそこに大きく影響を受けるということには、あまり期待して

いらつしやらないのではないでしょう。それは外部からだけではなく、きちんと宗教教育を受けてきた同志社の内部からの学生、あるいは他のキリスト教系中・高校から来た生徒たちに、私はちょっと共通した特徴があるなど感じています。

これは必ずしも悲観的に申しあげるわけではありませんが、大変居心地のよかった中・高校時代、そして讃美歌を歌えば皆がすつと心通じ合えるような空気、これが若い人たちにとっては「キリスト教」なんですね。今見えている世界の向こう側、つまり超越的な存在と関わるこ



越川 弘英氏

こしかわ・ひろひで／1958年東京生まれ。82年同志社大学神学部卒業。84年同志社大学大学院神学研究科博士前期課程修了、87年同研究科博士後期課程中退。84～86年シカゴ神学校（CTS）に留学。88年～92年日本キリスト教団中目黒教会伝道師・副牧師、92年～2002年日本キリスト教団巣鴨ときわ教会牧師。2002年より同志社大学キリスト教文化センター専任教員。専門は実践神学（礼拝学）。主な著書は『今、礼拝を考える』（キリスト新聞社、2004年）、『十字架への道、復活からの道』（キリスト新聞社、2005年）、『キリスト教礼拝・礼拝学事典』（共編著、日本基督教団出版局、2006年）ほか多数。

とによって自分の謙遜さを感じ、今ここにいない仲間がいることへの思いやりやイマジネーションを涵養することが大切なのに、もう少し広い範囲で社会の問題に取り組もうとする、あるいはそこに問題があることに気づいていくようなタイプのキリスト教にはあまり関心を示してくれない。むしろ彼らにとってキリスト教とは自分にとって居心地のよい世界、自己充足の世界なのです。これら、幼稚園から高校まで受けてきたキリスト教教育と、大学におけるキリスト教との間をどうつなげるかという問題がある。そういうジレンマを抱えています。

水谷 ●大学生はまた違う状況かと思いますが、いかがでしょう。

中村 ●若い人たちと接していて感じるのは、学生たちが宗教に対して非常にステレオタイプなんです。それは、現代の日本社会そのものが宗教というものの興行きをあまり感じないためなのか。そのところが非常に問題です。その点をよく分析しないで、同志社がキリスト教主義を建学の精神として持っているから、キリスト教的な枠組みあるいは精神を涵養していくという「形」だけに我々が関心を持つていいのかという気がするのです。

もう少し具体的に言いますと、同志社大学あるいは同志社女子大学がキリスト教主義の大学であるということは、社会的、世間的に非常に「あたり」がいいんです。キリスト教の大学だから雰囲気がいいだろう、自由だろうという香りを感じて同志社を志願してくださる。ところが、同志社に入ってから目当たりにしたキリスト教というものにどっぷりと浸かろうとしてくださるかという、ふつと引いてしまふ。学生だけでなく、保護者の方々も同志社のキリスト教には期待してくださるんですが、それは我が子のこと

礼拝に出る自由、出ない自由 ——その「自由」とは何なのか

越川 ●大学で最も大きな問題と思われるのは、カリキュラムなどの上で礼拝や宗教、キリスト教にふれるという必修性がなくなっていることなんです。かつては宗教学という必修科目がありました。現在ほとんどそういう縛りがなくなっています。それから同志社流の「自由」ということもあり、たとえキリスト教主義の同志社であってもそういう雰囲気になふれるかどうか、また講義でそういう科目を選ぶかどうかは自由ということになっています。なので、全然ふれない自由もあるわけです。大半の人はそちらの方の自由を行使しているのが現実なんだろうと思います。もちろん学生だけではなく、教職員の中にもそういう風潮がだんだん広がってきているのが現実でしょう。この風潮は同志社の小学校、中学校などに比べて格段に大きくなってしまっているのかなと思います。

私もキリスト教文化センターでは毎週学生礼拝を行っています。今出川と京田辺の2つのキャンパスを合わせても週に3回しか行われません。これ、本当



原 誠氏

はら・まこと／1948年福岡県北九州市生れ。

73年同志社大学神学部卒業。78年同志社大学大学院神学研究科博士前期課程（歴史神学専攻）修了。日本基督教団雲南坂教会の伝道師・牧師、（現）新島学園短期大学教授を経て、94年同志社に入社。専門は日本とアジアのキリスト教の歴史。現在の研究課題は、ファシズム期の日本のプロテスタント教会。学校法人同志社理事・評議員。所属学会は日本キリスト教学会、東南アジア史学会。主な著書・論文は『国家を超えられなかった教会 15年戦争下の日本プロテスタント教会』（日本基督教団出版局、2005年）、『キリスト新聞で読む戦後キリスト教史』（監修、キリスト新聞社、2003年）、『東南アジア史のなかの日本占領』（共著、早稲田大学出版部、1997年）、『戦時下の教会の伝道―教勢と入信者―』（『基督教研究』2001年）ほか多数。

に言っているのかなと思うんですが、参加する人数はかろうじて2桁を保っている状態なんですね。それは学生だけでなく教職員も入れて、さらに場合によっては聖歌隊やグリークラブが加わってくれますので、実質的に、意識的に出てきている学生は下手をすると一桁であるという状況が、決して稀ではないのです。他方、学科としての宗教学はもちろん神学部などの先生方が提供してくださっているわけですが、それも神学部以外の学生たちがどの程度取っているかというところ、ある程度限界がある。こういう中で、どういう形でキリスト教主義とかキリスト教教育というのを感じてもらい、触れてもらうか。極端なことを言えば、讚美歌

を歌う、聖書をちよつと読んでもらう、祝福してもらうという経験は、もう入学式と卒業式だけということもある。同志社の中学校、高校で毎日礼拝を通じて育ててもらった学生たちが、大学でこれをフォローできていないことについて、本当に申し訳ない感じがします。このあたりの基本的な問題について、同志社の「自由」というものをいいたいという捉えればよいのか。私は最近、大変疑問を持ちながら考えています。

これは組合教会（注：会衆派の日本名）の特質でもあります。各教会の自由、同志社各学校の自由、各学校に所属している学生の自由、教職員の自由、大学の学部での自由と、色々なところに「自由」

う言ったとかを勉強しますが、体験を通じて「人間とはこういうものである」「こういうものが人間らしい生き方であると思う」と書いている学生は100人中2、3人しかいません。中には「こんな問題を今まで考えたことはなかった」という学生もいるんです。体験することについて、すごく弱い。この授業を選択している学生は1、2年生が主ですの

省の評価や雑誌によるランキングなど、目に見えぬ形のクリアな満足度、カフェテリアのような満足度で大学が評価される時代の中で、「人間とは何か」なんてあまり考えず、成績さえ良ければ大学には入ってこられる。それで大学に期待するのは就職率の良さなどであるわけ、同志社大学の教職員が学生に与えたいと思っているものとの間に根本的な溝があることをいつも思います。

まだまだこれからのかもしれないし、キリスト教教育というよりもリベラルアーツの範疇になってくるのかもしれないが、基本的なものの見方や価値観を大学が教えなければいけないんだろ

特に大学の場合は、成熟した人間として個人の尊厳、個人の意思を前提にしないといけません。一応、個人としての尊厳を持っているという前提で、学生たちと一対一で向き合おうというチャネルを私たちは確保しようと思います。すると、そこで出てくるのは、知育に対して各学部でできる限りの授業を保障していくという姿勢。本来は知育・徳育・体育があり、その一番根元にあるのがキリスト教主義であるというのが同志社の創立以来の立場であつたものが、現在は大学の中

キリスト教教育・良心教育を大学全体で共有する必要性

原●今の越川先生のお話も、まさに今の大学の状況を語っていますね。文部科学

でも、その知育の部分に焦点が当たり過ぎていてはいないか。たとえば、新しい学部の設置は必要なことなのでしょうが、時代の流れに即応していかねばなら

状況にあり、キリスト教主義や良心教育というものが、大学の中でシェアされていないような気がします。

私の専門は日本のプロテスタントのキリスト教の歴史ですので、そのことを踏まえて考えた時、日本の近代化が個の尊厳、個の自立に依拠して始まったものではないことを思います。日本社会では、自分は人間であつて神ではないという基本的な考え方を歴史として経てくることなしに、民主主義が与えられたんですね。あるいは外圧によって迎えられた明治維新であつたりした。そうしてできたテクノロジ社会が日本では進化してきたけれども、個の尊厳はなぜ大切であるのか、ということがきちんと認識されにくい社会であつたのではないかと思います。

疑似近代的、疑似科学的なカルト集団が非常に流行っていますね。古いもので、占いと何かということがきちんと吟味されないうまま、共通の話題を作る時に便利だからと語られている。本来なら大学でそういうことを判断するための合理性、批判精神とちゃんと向き合つてほしいのに、学生だけでなく教職員までもがそういう精神を養つてこなかった。社会全体がそうであるので仕方ないのか

などとも思います。

「同志社科目」の提供は、同志社に入ってきたからには同志社、キリスト教、新島について知ってもらいたいということとで始めました。キリスト教文化センターと神学部が一緒になり、全学部に提供しています。ただし、これも学部によっては選択科目になっていきますから、それを選択しないで卒業することもあり得る。そういう状況でありながら、京田辺にも新しい学部が設置され、さらに2学部の設置が検討されていますが、私たち神学部の教員は京田辺に責任を果たしてゆくという共通認識を持っています。少なくとも週に1回、京田辺へ行くというのが私たちのコンセンサスです。

もう少し言いたいのは、先ほど「自由」についての話が出ましたが、新島襄の葬儀で、葬列にあった勝海舟の幟にこう書いてあったんですね「自由教育自治教会両者併行邦家萬歳」。私の理解では、自由教育とは国家を超えるものであり、そのような尊厳を拓いていく教育であるという意味だと思いますし、自治教会も国家という枠を超えたものなんだというのが、新島の最も根本的な信仰であり思想だったと思うのです。そのことを私たちが

は同志社の中で国際主義とかキリスト教主義とかを口にする前に、もっと内容的に吟味しないといけないのではないかと、私も授業の中で伝えていますが、全学的にも考え、伝えていく必要があるのではないかと思いますね。

会衆派の唱えた“自由”の長所と脆弱性

水谷●新島襄はアメリカに渡ってから、会衆派の環境の中で、大変良い経験を積み重ねたのだと思います。それが同志社の土台になっていると思うのですが、そういう部分は理屈としてではなく体験として非常に大切なことだと思いますね。たぶん幼稚園とか小学校ではそういうことを志向されていると思いますが、それが中学、高校、大学になってくると、だんだんそういう側面が薄らいでくると思っています。それを共有しようと思っても子どもはもう自立し始めていますから、そういう環境の中になかなか入ってこない。

会衆派の発想は、自ら受けた体験を現実の社会で発揮していこうとする傾向が強いと思います。たとえば、修道院など

に閉じこもって俗世間から離れてキリスト教の宗教性を発揮するのではなく、現実の社会の中で発揮しようとするわけですね。そういう意味では、会衆派は伝統的に実践的な活動を非常に重要視してきた。加えてもう一つの特徴ですが、いかなる権威からも自由であるという自意識を強烈に持っていた。それは国家権力からの自由でもあるし、キリスト教を権威的に押し付けることをしない自由でもある。ひょっとしたら同志社では、それを守っているという点が逆に壁になっているのかもしれない。そういう押し付けを拒否する中で実践的な教育を行ってきたのが、たぶん同志社のキリスト教だと思っていますね。

高校までキリスト教の良い雰囲気の中で育ってきた子どもたちがその中でまとまってしまい、広がりが出てきにくいというお話がありました。それは同志社的なキリスト教からすると、本当は突破していくものなんです。その意味では我々自身の、そのキリスト教とはどのようなキリスト教なのかという自己確認が必要であると感じますし、同志社の学生や教職員が皆持っている「自由」という認識を考え直す必要がありますね。我々

の自由が、新島の自由と同じなのかどうかを。

中村●新島の国家観からすると、自由とは国家を敵視するものではないと思います。個人の自由が奪われることへの危機意識と言いますか、そういうことから自由にならなければいけない、人間としての尊厳を奪われない自由、そのためにはどういう人間になるのかというものであると思うんです。

水谷●女子大学の宗教教育の現状はいかがですか。

中村●大学と比べて女子大学はかなり小規模ですが、ほぼ6000名の学生を抱え、全国の女子大学ではかなり学生数の多い大学です。2つのキャンパスで毎朝礼拝をしています。私たちはキリスト教文化センターのような専任教員のいる宗教部を持っていますが、基本的には全ての教職員がキリスト教主義教育にあたるという理念を創立以来持っている、私は理解しています。

科目については、私の赴任当時は正直言って、なぜ「キリスト教」ではなく「聖書」なのか、よく理解していませんでした。「聖書」という科目で授業をしている大学は非常に少ないんですね。

女子大学では宗教としてのキリスト教を教えるようにしてきたのではなく、聖書の価値観、聖書が人間をどう理解してきたのか、人間を超えるものに対してどういう態度を表明してきたのか、それによって涵養される精神というものを大事にしてきたのではないかと思います。

最近では女子大学も新しい学部を設置して学生や教職員の数も増えてきましたが、基本的には全学教授会によって全てを決めています。文部科学省の設置基準でいいますと、学部レベルの教授会が意思決定をし、決まってくるのですが、私たちも各パートでかなりのことは決めていきますけれども、最終的には全学教授会を大事にしています。宗教教育に関わる色々なデータやプログラムなどは宗教部の責任者から報告があり、科目以外の宗教関連プログラムについての情報は、基本的には全職員が共有できるシステムができています。

礼拝時間の変更とか、大学のような方式にしたかどうかという議論はありますが、こういう議論は女子大学の中では決してタブー視されていません。そういう議論は、同志社女子大学にとって一番大事なことは何かという原点に帰る

教職員の意識・良心を喚起して種を蒔き続ける

桜井●いま大学の先生方のお話を伺っていますと、学生たちの思考が切られてい

るということを感じます。つまり「人間とは何か」を「考えない」選択をしている。何のために生きるのか、キリスト教や聖書の説く生き方を考えなくてもいいという、非常に切り取られた思考を持った断片的な学生像を垣間見ます。皆が皆そうではないと思いますが内向きであつて、非常に閉じられた世界にいる。本当はもつと選択肢が広がってたくさんの方があるにもかかわらず、最初から考えなくていいということである学生たち、ではどうやって教えるのかとなると、アプローチや問題提起の仕方などに課題が多いとは思います。「原点に帰るチャンス」、全体で決めていくシステムというのは、切り取られた学生たちを受け止めるための「トータルな人格としての学校」形成だという気がします。少なくとも教職員がもつと人格的に成熟していないと、学生は結局閉じられたままではないかと。切り取られた生徒に切り取られた教員では、何にもなりませんね。

中村●そういう意味では、学生の良心ではなく教職員の良心が問われている。同志社教育というのは、とつても贅沢な教育だと思うんですね。教職員の良心や質が問われないと、学生たち一人ひとりに向き合えないという問題を抱えている理念ではないかと。

桜井●中学生というのは聖書のコンテキストに合っているんですよ。生徒が物事を考えたり人生を生きていくことと、聖書を読むということが、ものすごく合致している。意外に思われるかもしれませんが、生徒たちは聖書をよく読みます。僕は聖書のコンテキストと生徒のコンテキストとの橋渡しをする。すると生徒はそこで超越者の存在を感じ、自分の生き方に取り込み、あるいは共に生きるという生き方を発見する。それは新島襄を教える時も同じで、新島襄のコンテキストにも合致しています。だから僕は、新島襄の生涯も聖書も教材化していくんです。あくまで主体は生徒であつて、新島教を作るものではないし、キリスト教徒を作るものではない。それらを教材化していつて生徒を育む。それだけの力量があるかどうか、僕たちには問われるわけですから。

原●私も深く共鳴しながら今のお話を聞きました。大学では各学部でカリキュラムを決めますが、その中で今言われたようなことを、つまり何とか殻を打ち破ろうとする先生方も何人かはおられます。

体験が不足しているのです。

それから、同志社が新しい試み色々していくことは悪いことではありませんが、世の中の競争原理というか、「自分さえよければいい」という考えが学校間にもあります。私たちが同志社の教育に携わっていく中で、自分たちの学園だけでなく、それが他の学校にも良い影響を与えてゆく「地の塩」的な働きができていく同志社であるのか。本当に同志社でなければできないようなことをやっているのか。そういう疑問が今、僕の中にあるわけです。そういうことを考えることが、戻るべきところを考える際の一つのヒントになるのではないかという気がします。

菅根●教会には礼拝を求めて来られる人が多いわけですね。目的がはっきりしています。ですから説教する側も、ある程度固定化したメンバーの中で、積極的に来ているであろう人たちと向き合うという意識を持っています。ですから教会からキリスト教主義学校へ行くと、しんどいという牧師がいますね。教会教育というのは卒業や終わりがなく、死に至るまで終生関わりを持っていきますからそれなりに大変ですが、ある一つの目的を持

私もまだ12年目ですから全てのことを知っているつもりはありませんが、そういう授業をする先生と、それに反応する学生たちとの間で広がってくる世界というもの、同志社の中に増えつつあることを願います。何かを求めている、何かを問いたい学生もいるんですね。その両者がうまくかみ合えば、いろんなことが可能性としてある。その種を蒔き続けることが大事だと思います。

中川●私たちの学校では「宗教」という名で授業をしています。やはり聖書を通読し、聖書の持つ豊かさを何とか伝えていきたいと考えています。したがって、1年生から聖書の本文そのものを読んでいます。

大学の先生方の体験不足などのお話を伺っていて思いましたが、中・高校ではある程度本人の意思や自覚があつて入学してくると思いますが、小学校や幼稚園では、圧倒的に親の意志が反映されて子どもが入ってきます。その時にたとえば、貧しさということのリアリティを教える時、私たち教える側は非常に矛盾を感じるんですね。先日原先生がタイの先住民族の先生方を連れてきてくださった特別授業を行いました。子どもたちの

つて集まっているという点では、私は教会の牧師で良かったなと思ったりもします。

ただ、私どもの神戸教会も会衆派の伝統をかなり色濃く持っていますので、信徒の自由や良心というものに訴えかけています。今の幼児教育で言えば「気づき」というものを大事にしています。すると規範とか形ではなく、「気づき」というものをどう自分の力で獲得していくのかというところで、会衆派の伝統を持った教会の多くは踏ん張っていると思うのです。たとえば、信条主義を中心として組織を作ろうとする教会は、「信徒訓練」という言葉で表される一つの枠を作ることでできます。会衆派の伝統を持った教会は、そこを極力避けていく。そういう意味では、会衆派の伝統を持つ教会は忍耐が要ります。

先ほど桜井さんが「学校全体のパーソナリティ」ということをおっしゃいました。また、中村先生が「教師の良心」とおっしゃいましたが、教会も一つの組織、法人であるわけですから、私も牧師をやっている、規範化できるものを求めようという誘惑にいつもかられます。そういう意味で会衆派の伝統を持つ教会は、制

度や組織ではなく「気づき」を与えていくような関わりですから、どうしても牧師や信徒のパーソナリティが決定的な要素となっていくわけです。すると、人間的な限界が共同体の限界になってくる。逆に、これで我々はやっていけるのだろうかと思うのです。でも私は京阪神にある教会として、同志社には、たとえば神学部であれば教師の良心やそのパーソナリティをもつと強く養い、発揮していただきたいと思うのです。我々もそうしていかなければと思っています。

少し話が外れますが、最近同志社の卒業生の方が洗礼を受けられて入会されました。同じ会衆派の伝統を持つ神戸女学院の方も来られました。お二人とも会衆派の伝統の中で育ってきた方々ですが、いろんな教会に行つたというのです。でも神戸教会の礼拝堂に入った時に「あつ、この雰囲気だ」とおっしゃったんですね。先ほど「種を蒔く」というお話がありましたが、全くキリスト教と関係のなかった人が教会あるいはお寺かもしれない場所が、そこへ行こうとする時、やはりどこかに受け入れる素地があるんですね。それは何なんだろうと私は思っていたのですが、今日のお話を伺っていて、やはり

私たちの教会と共通するものがあるように感じています。

中村●私の印象でも、そういう卒業生は多いですね。卒業して住んだ土地でいろんな理由で教会に行った時、同志社に帰ってきたように感じたという話を随分聞きます。

桜井●人格的云々というのは、決してカリスマ性があるという意味ではないんです。被造物としての人間性というものです。それに立脚していれば、まさにそういう気づきが出てくると思います。それは規範とか形というものからは生まれません。

新島が会衆派教会で 培ったものを教職員が共有し、 共通の基盤に立とう

中村●新島が育った会衆派の理念を持っておられる今の菅根先生のお話には、私も励まされました。同志社の教育の力というものがあるとすれば、やはりそういうところにあるのではと思われたのは、たとえば様々な宗教がある中での一つの宗教としてのキリスト教ということであれば、クリスチャン教員がこれだけ

しかないという種類の話にどうしてもなってしまうですね。そうすると、クリスチャン教員とそうでない人との間に溝を作る方向にしか話が進んでいきませんが、そうではなく、新島の言う良心という、人間として共通に持てる地盤に立つて学生を育ててゆこうとした精神は、これはノンクリスチャン教員とも共有できるものです。私は女子大学で、建学の理念としてのキリスト教って何なのかとよく聞かれますが、思想信条の自由として語るキリスト教ではなく、建学の理念を語るのであれば、お互い共通の地盤に立たないと学生の前に立てないのではないかといいことを申しあげています。

菅根●会衆派の伝統というのは、いつも形成途上なんでしょうね。そのかわり、苦悩するんですよ。もつと強固な組織を作りたいとか。一種の誘惑を持ちます。**桜井**●しかし、その誘惑って結局は人が人を支配し、操るという暴力装置としてしか働かないのではないのでしょうか。

菅根●ただ、規範や理念がない部分では、たとえば戦時下での教会の戦争協力など、強大な国家というものに絡め取られてしまう時、逆に弱さとなりますよね。

越川●ある面において組合教会というの

は、外的な強い規範性があるわけではなく、「枠組みをこのへんにして集まりましょう」といった緩やかな教会なんですね。それが同志社という学校の性格にも出ているのかもしれない。逆に言うところ、もはや現在では、世界中に単独の教団・教派としての組合教会というのはほとんど存在していません。新島が卒業した学校にしてもキリスト教を事実上放棄している、という話を聞いたこともありま

す。それなのに同志社は、まだキリスト教を掲げているだけ良いのかもしれないけれど、こういう世界の流れを見てみると、私たちはいつたいていどうなってしまうんだろうと、ふと不安になることもあります。

中村●私はセクトとかチャーチとしての会衆主義という問題ではなく、学校法人としての、教育にあたる人たちの集団としての同志社の理念の問題を語るのであれば、それは世界で会衆派教会が消えていつている問題とは次元が違うと思います。

人間の可能性は共同体の可能性であるということですね。そこところが非常に危ういけれども、我々はそれを軸にしようとしているということでしょうか。

キリストの内にあって 良心に束縛された「自由」

平松●共同体的な可能性といえば、教職員の良心というものは非常に大事になってくると思います。主人公は園児、児童、生徒、学生なので、彼らをどう導いてゆかかという意味での教職員の良心です。はつきり言って、同志社は良い意味でみんながバラバラの学校なんですね（笑）。各学校、それぞれの特色があるという意味で、僕はそのバラバラさがいかなと感じています。以前、西本願寺の前を歩いていたら、「バラバラで一緒」という標語があつたんです。僕はその言葉にとっても感じ入りました。「この言葉は同志社的な！」と思つたのです。同志社もそれぞれがバラバラだけど、みんな一緒なのです。その「一緒」は何かと考えた時、それが「自由」だという今日のキーワードだと思っています。

その自由の原点に立ち返った時、新島

が出合つたキリスト教やアンドーヴアー神学校で学んだニューイングランド神学の教えの中にあつた神学的自由の意味が、そこにあるのではないのでしょうか。ここで言う神学的意味での自由とは、「イエス・キリストの内にあって、良心に束縛された自由」という意味です。ここにこそ、新島が大切にした自由の原点があるのです。これは非常に厳しい自由だと思っています。だから生徒・教職員が「キリスト教にふれなくてもいいという自由」は、同志社にはないのです。教員がキリスト教を教えずにいいという自由など、そこにはあるはずありません。したがって、僕たち宗教教育に携わる教員が、「キリスト教を教えずにいい自由」を主張する教職員を、どのように導いてゆくのかわという課題もあります。

桜井●新島が言うのは、バラバラであることの根拠が「自由」ではなく、他者との関わりの根拠として「自由」を言っているのだと思うんです。それを考えたら、先ほどから出ている「自由とは」「自由主義とは」という議論に、もう少し肉付けができるし、体感的なところへ広がってゆくのではないのでしょうか。

水谷●新島も同志社を創るという方向

「良心を手腕に運用する」という部分も多いですが、結構多いのは「一国を維持するは、決して二、三英雄の力に非ず」という箇所なんです。「良心」の部分は生徒たちは良心教育とかいう言葉で知っていますから線を引くんですが、むしろ「二、三の英雄の力ではない」という新島の心に惹かれるということ。今や我が国は、社会の秩序が破れ、規律が乱れ」という部分にも線を引く。「その通りだ、僕らのクラスがそうだ」と（笑）。そういう部分に線を引きながら、「他者に対する思いやりの情に厚いキリスト教の道徳」という箇所に線を引く生徒も、これは意外に多いですよ。私学の独自性を訴えている部分への共感も非常に多い。今の時代を子どもたちなりに見て、いつも「二、三の英雄」が世の中を動かしているのではないかというところに、危機感を持っているのではないかと思えます。新島が会衆派の中で培った、決して知育に偏らない体験的、人格的なものは、学校の現場では新しく命が与えられて生きているという感覚を私は持っています。

水谷●人間的な限界が教会の限界であるというお話がありましたが、逆に言えば、

で、自分の自由を行使した。積極的に選び取ってゆく自由ですね。ですから我々も、同志社の将来についてそれぞれに異なった方向を主張しながら、人間に焦点を当てつつ建設的な自由を考えるわけですね。

良心を持った教職員集団で あるために必要なソフトとハード

原●アメリカのキリスト教の動きが話に出ましたが、自由教育、自治教会という世界は、今の時代の状況だからこそ必要だと、授業をしながら改めて思います。入学式でも読まれる大学設立旨意書に、大変重要な部分があります。ご存じと思いますが、これは抜粋で、本来は400字詰め原稿用紙20枚にも及ぶ長文です。それを読んだ時、抜粋にはない部分で非常に重要な部分があるんです。

たとえば、「基督教主義を以て徳育の基本と為せり、吾人が世の教育家と其趣を異にしたるも茲に在り、而して同志社が数年荊棘の下に埋没したるも亦た茲に在り」という部分。その前段に「又た既に人心を支配するの能力を失ふたる儒教主義に能くす可き所に非ず」とあります。

これは東京大学を中心とした国立大学では、もう教育はできないと言っているんですね。世の教育家というのは、実学、実学と言っていた慶應の福沢諭吉のこと。同志社大学も今は時代の要請で実学に対応しているようですが、それは違々と新島はここで言っていました。この後に「之れを要するに吾人は敢て科学文学の智識を学習せしむるに止まらず、之を学習せしむるに加えて、更に是等の智識を運用するの品行と精神とを養成せんことを希望するなり、而して斯くの如き品行と精神とを養成するは、決して区々たる理論、区々たる検束法の能く為す所に非ず、実に活ける力ある基督教主義に非ざれば、能はざるを信ず、是れ基督教主義を以て、我が同志社大学徳育の基本と為す所以ん」という言葉が続きます。

我々は入学試験の中で、どれだけ記憶したか暗記したかという風潮が、これはGPAも含めてあるわけですが、これにどれだけ教員が縛られているかという世俗的な状況の中で、教職員集団の良心がそれをどれだけ打ち破っているかが問われていると思います。旨意書はこういうふうに言葉が続きます。「吾人の目的斯くの如し、若し夫れ此事を目して基督

教拡張の手段なり、伝道師養成の目的と云ふ者は、未だ吾人の心事を知らざる人なり、吾人が志すの所の者、尚ほ其上に在るなり、吾人は基督教を拡張せんが為に大学校を設立するに非ず」と。これは授業でも使っているんですが、学生たちに知っておいてもらいたいことですね。

越川●人格の影響力ということについては、人格教育や理念というものが重要になります。それを共有する最低限の場を用意しておく必要があるのではないのでしょうか。つまり世は滔々として実学に流れており、大学もはつきり言って専門学校化している側面はけつして否定できませんよね。幼稚園でさえ親は知育を求めて子どもを行かせ、精神教育や良心教育をしてもらおうとは思わない人が増えている。同様の考えで大学に来る学生がいる。それでもさらに教えてゆくのが我々の役目であるわけですが、そういう状況の中で学生、教職員が一つのコンセンサスを持つことが必要なんです。広義のミッションですよ。「私たちの使命は何なのか」「なぜ同志社は存在するのか」を少なくとも話し合える共通の土台が必要だと思います。

客観的にみて、幼稚園、小学校、中・

高校をそれぞれ一つのコミュニティとして捉えた時、これはわりとまだ話ができる人数規模であり、そういう機会も設けられるように思うのですが、数百という教職員のいる大学で一つのコンセンサスを作っていく難しさを正直言っている感じが、そういう意味で今の大学の状況が「きわどい」と感じているのは事実です。

平松●女子中高では数年前から、新任教職員に対してキリスト教のオリエンテーションを始めました。新任教職員も入社してすぐに生徒の前に立つて礼拝指導をするわけで、キリスト教を少しでも知っていてもらいたいという願いから始められました。約半日をかけて、キリスト教の基本的なことを一緒に学びます。それに加えて、若い先生方には積極的に宗教行事に参加してもらい、様々な分かち合いをしてゆきます。そのためか、最近では若い教職員のキリスト教理解と協力がとても積極的だと感じています。とても嬉しいことです。

中村●私は少し違った視点を持っています。こういうメンバーが集まってキリスト教教育について話すと、つい教会密着型のキリスト教になってしまいますが、

私が同僚と話していて思うのは、キリスト教教育を意識しないけれど、これは同志社教育だなどというのを、先生方はゼミや授業の中で、やはり懸命にやっているとしゃやいます。各学校の中で孤軍奮闘していると感じるのではなく、お互いにもっと評価したり分かち合ったりできるような気分であることも、私なりに大事なことと思っています。

桜井●僕はむしろ、新任の先生方へのキリスト教のガイダンスの意義について疑問がありますね。以前入社式後に行われていたように、ガイダンスでビデオを見て終わり、であるはずがない。人格的な交わりがないと成り立たないことです。それは学校でも教会でもそうだと思います。強制的な研修というシステムは作れると思いますが、それでいいのかという問題がある。最初の時点で「気づき」がなくても、長いスパンで働いていく中で、それぞれがそれぞれの「とき」を得て気づいていくという可能性は、いつも開かれていると思うんです。そのためには忍耐が必要だし、一生懸命種を蒔きながら、力を尽くして待つということが必要ではないか。これは愛がないとできないことです。僕が言ったら非常におこが

ましいのですが、中学生がいろんな問題を抱えているのを見ていて、「やっぱり愛ですよ」と僕は言う時があるんです。システムだけでは、長い間に形骸化してしまう恐れがありますから。

中村●大学の教員は、入社時にすでに年齢の高い方が多いですね。他の大学や社会でいろんな経験を積んでおられるし、中には前職が仏教系仏の方もおられます。その方たちに、「うちはどうだから」とキリスト教を押し付けるのは、私はある意味その方の人格を損なうことではないかと心配します。

女子大学では様々な宗教行事があり、礼拝があり、聖書を読み、教授会もお祈りが始まります。その中であって、長い間おられる同僚の中には「一人ひとりが大切にされることを感じる」と言う方がおられるんですね。そういう教員は、やはり学生を大事にしています。「キリスト教教育をしましょう」と言っている我々が、そういう信頼感を他者に対して持てるかどうかが問われています。

原●ソフトの部分とハードの部分、両方が必要でしょうね。ソフトの部分とは、この巨大な同志社という教育機関において、学部にもよるでしょうが圧倒的多数



前列左から 堂腰教諭、原教授、菅根牧師
後列左から 水谷教授、平松教諭、中川教諭、桜井教諭、中村教授、越川助教

ん。自由とは何か、その自由の中に厳しさがあつて、優しさの中にも厳しさがあつてこそ本当の優しい子に育つてゆくのだ

の教職員がクリスチャンではない、あるいはさまざまなキリスト教理解があるという状況の中で、我々がどのように学生と関わるかという問題です。ハードの部分とは、たとえば教職員にすれば、勤めた先が同志社という学校です。では、同志社とはどういう理念の学校なのか。ある程度は一応オリエンテーションで知っていてもいい。あるいは新任教職員の研修会やキャンプがありますが、そういう場に法人全体や大学として「行きなさい」と言える環境が整っているかどうかということだ。

越川●ハードという言い方とは違いますが、「型」はあるわけです。先ほど女子大では教授会でお祈りをするとおっしゃいましたが、大学ではしていません。水谷●していないでしょう。

越川●教職員にとって、お祈りをすることは教育の現場になつていくわけですね。それによって型ができる。毎日そこで仕事をすれば、キリスト教というものにふれる一定の機会になります。そういう置かれていく環境が、法人内の各学校で違うという現実がある中で、先ほどのような新任の方の教育についてどうすればいいのかを考える時にも、同じ同

志社の中にいながら、我々はそれぞれ違う前提や意識のもとにあるという課題があると思います。

水谷●法人の中の組織規模が大きくなるにつれて露わになつてきた矛盾を一身に引き受けておられるのが、キリスト教文化センターの越川先生ですね。

桜井●その差異という点で言えば、中学生は非常に正直ですね。礼拝一つをとつても、それが人格的な配慮があるものでなければ生徒は寝るし、礼拝を壊しかかります。システムではなく中身の問題なんです。教授会の祈りにしても、他者へのとりなしの祈りがそこにあるかどうかで全然違うと思います。

越川●大学ではそもそも、皆でお祈りをする場が少ないのです。そういうセッティングも頻度も非常に少ないということとを私は言いたいのです。

同志社自体の「キリスト教主義」理解と、伝えていくこうとする姿勢の重要性

水谷●「キリスト教主義」と言った場合、その多くは授業で知的に提供されます

ということを伝えてゆく必要があります。「難しい漢字が書ける」「こんな計算ができるようになった」などと目に見える成長よりも、目に見えない成長（心）が大切です。

自分の喜びだけでなく、他者に対しての優しさや思いやり、人のために喜び、尽くす人間となれるように成長していく。それが同志社のキリスト教主義が生かされることだと私は思います。そのためにも一貫教育の中で独自性を持ちながらも、キリスト教主義を繋げていき、共有した連続性を大切に向かつていくことと、教職員が発信していく必要性を感じます。

一貫教育の中でつながっている一本のものを共有していくことが、これからの課題でもあると思います。

水谷●とりあえず、その道しかない気がします。それがオーソドックスな方法ですね。

平松●どのように宗教教育で教員の協力を得るか、その持つて行き方は非常に大切だと思ひます。また、女子中高でも試みを始めたところですが、保護者のキリスト教理解を進めていくことが非常に大事だと思ひます。方法は色々あると思ひ

ね。問題はそれを伝える側、つまり同志社自体がキリスト教に基づく理念を適切に理解しているかどうか、そういう体制を組んでいるかどうかということだ。

この問題は、幼稚園から大学まで含めてあると思ひます。同志社のキリスト教主義が生きているかどうかは、園児・児童・生徒・学生たちが、卒業後もそれについて何か積極的なものとして感じ続けられるかどうかということでしょうが、そのために、同志社自体がキリスト教主義を理念や環境として保とうとしているのかどうか大きな課題になります。そういう姿勢があるのなら、我々の人格教育とか人間の可能性といったものが、同志社という共同体の可能性につながっていくのだと思ひます。

堂腰●キリスト教主義というのは、人格形成につながっているのではないのでしょうか。幼稚園では礼拝を守る、讃美歌を歌うという形だけではなく、聖話を聞いたり、道徳的な話も聞き、いろんな人がいることを知り、たくさんの経験の中から心の成長があります。教育方針の一つに「自由に、伸び伸び」とありますが、それを何にしても好き放題というようにはき違えている保護者が少なくありません

ますが、保護者に礼拝に参加していただく取り組みを年に数回ですが始めたところ。こういう小さな輪が広がって、保護者と生徒と教職員の良い連携ができるいい良いと思ひます。

菅根●教育基本法が改正される中で、教育が国家の手段になつていく傾向が、今後は著しく出てくるであろうと思ひます。国家が教育に仕えた時代から、今度は明らかに目的が変わつてゆく中、学校や幼稚園のあり方が問われてゆくのではない。新島が考えた教育のパスが今、最も求められているのではと思ひます。今が正念場ではないかと。

水谷●現在の日本では、公立学校では宗教の情報を与えてはいけない、教えられない。したがって大学に入ってくる人たちの大半は、宗教に対する基本的理解を持っていません。現代の日本の宗教事情では、そういうことに起因するトラブルも多いようです。キリスト教に基づいた教育体制を確立することの重要性を感じます。それぞれの学校の枠組みの中で、それぞれの可能性を広げるような試みを今後も続けていただきたいと思ひます。本日はありがとうございました。（2006年12月5日有終館第1会議室）